

【1】

「くっ……どうしてこんなことに……っ」

視界がようやくクリアになり自らの置かれている状況を把握した未来は誰に向けるでもなくそう呟いた。呟かざるをえなかった。

それはどちらかというところ、事態を確認することや自分がいかにしてこんな状況に陥ったかどうかよりもむしろ、自分がなぜしくじってしまったのか——自らの失態に腹が立ったからだ。

「(もつと魔力を温存さえしていれば……ああ、もうっ……)」

思い出すだけで自らの迂闊さに苛立つてくるし、何よりも、さっきまで自分が戦っていたたかだかスライムごと、いに未来の四肢は宙づりになる形で拘束されていたのだ。スライム側にしてみたらこれ以上ない褒美だろう。さっきまで

『こんなスライムじゃ準備運動にもならないんだだけどなあ』

『いくら束になったって、所詮はスライムなんだから！』

などと散々煽られてきたのだから、仮にこれらに人間の言葉が理解できるような知性があるのであれば、事態はもつと最悪だっただろう——。

「(でも、変身が解かれてないっていうことは時間稼ぎさえできればどうにかなりそう……。

「なんたって、アイツらは……」

今まさに自分が囚われているのは培養層——その壁になっているのは頑丈な強化ガラスだ。この手のガラスというものは物理に強いだけであって、全身に魔力が戻りさえすれば、その力を解放することでこのくらいの厚さあればきつとぶち破ることができるだろう——未来にはそれなりに勝算があった。

いやに透明度の高いガラスの向こうには、自分より年が一回りほど上の不摂生がたつていそうな小太りの研究員と細く色の悪い研究員が二名と、それに付き従っている白衣の研究員が数名。それぞれが眼鏡をくいくいとしながら、少し見上げるようにしてこちらを見ている。それもそうだろう。

「(……本当に最悪ッ……じろじろ見ないでよ……)」

思わず眉間にしわを寄せながら、汚物を見るような目で研究員たちを睨む未来。腕や腿を動かそうとしてもがっちりねっとり拘束された未来の身体は、腰だけが少しだけくねるくらいだった。

だからこそ未来は余計な体力を消耗しないためにも動かなかったし、何よりも腰を動かすことによつておるんと左右にイヤイヤをする自らの乳房——。

いつの間に剥がされたのだろうか、自分でもこれ以上なく気に入っていた戦闘服は無惨に破かれており、それだけでも未来の怒りは激しく燃え上がるというのに、そうして露わになった

未来の躍動感あふれる豊満な白肌をこのような卑劣な組織——通称『財団』と呼ばれる未来たちにとつては忌々しい存在である敵に見せつけてしまっているのだ。

それが乳房だけならまだしも、同性の友人たちにすら見せることのない乙女の聖域——未だ誰も踏み入ったことのないその絶対不可侵地帯すら見せつける形になってしまっていることが、未来にとつては屈辱でならなかった。

下手に身体を動かすわけには、一人の少女として——女として、それはプライドが許さなかった。

「前に捕まえた子よりも乳首大きいですよね」

「俺はこのくらいの乳輪と乳首くらいあったほうが好きだね。ああいうのは勃たせたら化けるんだよ」

「化けるって、いつもそうやって壊すじゃないですか。たまに壊す前にやらせてくださいよ」

「(くううっ……なんでこんな下品なやつらに……)」

今は言わせたいように言わせておこう——どこかにチャンスがある以上、未来は耐えるしかなかった。耐えながらも、自らの身体をああでもない、こうでもない、ここがどう、と品評していることに腹が立って仕方がなかった。顎あたりにハイキックの一つでも食らわしてやらないと、腹の虫がおさまる気がしなかった。

「で？未来ちゃん、だっけ？自慰行為は週に何回してるの？その身体とお年頃で、全くしてな

いなんてことはないよねえ？」

「……」

「自分でするときどこから責めたりするのかとか、最近何見ながらしたのかとか教えてくれたら、こつちだつてちよつとは考えてやつてもいいんだよ」

思つてもないことを——と未来は怒りで頬を染めながら二人を見下ろす。

いや、その中の1割くらいには乙女の恥じらいというものがある。人間、言われるとどうしても意識をしようもので、宙を向いた乳首は吹いてもいいはずの空気の些細な流れに一瞬切なさを帯びた。

主導権を握られてはいけない——と理性がそう判断するより先に、未来の直情は口を開かせた。

「こんな卑劣なやり方でしか女の子をモノにできない人たちに教えることなんて、一つもないよーだ」

思わず語尾が幼稚になってしまった未来。意識して放ったわけではない。考えるより先に行動してしまう性格が、こんな状況で思わず未来の舌を少しだけ下にペロっと出しさえもした。

それはある意味、未来が持つ勇氣と勝算がカラ元気に混ざつて掛け算を生んだものだった。

「前に捕まえた子つてさつき言つてたけど、迂闊だったよね。それつてやっぱり、最近あちこちで起きてる同業者の失踪事件、やっぱりあなたたちが絡んでることじゃない。いいの

なあ？このまま私、うまく逃げだしたりなんかしたら大変なことになつちゃうよね？言うよねー、口は禍の元、つて。そんなんだから女の子にもモテずにこうして目の前で女の子の裸見、知つたような知識ばかりひけらかすことしかできないんじゃない？女の子つて、男の人が思つてるほどそこまで単純な生き物じゃないんだから」

一度言い始めると言葉というものは案外すんなりと次々に出てきてくれるもので、しまいは勝ち誇つたような表情で未来は研究員を見下ろしていた。

小太りのほうの研究員は頭に血が上りやすいタイプなのだろう、見るからに先ほどまであった余裕の表情が今は強張つて、未来を敵対存在としてしつかりと——先ほどまでのようにその身体ではなく、今は表情を睨んでいる。

「……」

瘦せたほうの研究員が耳打ちをすると、小太りの研究員は歪んだ笑顔を向ける。

何をしようというのか——未来の頭の中に浮かんだのは、せいぜい先ほどこのスライムたちが自分に襲い掛かったときのように窒息させようとするのか、あるいはこの培養層のことで、水責めでもしようというのか——それ以上のことは考えようがなかった。普段相手にしている魔物だつて、所詮はもともと何かしらの生き物を遺伝子組み換えなどをしたようなものだ——時折男子学生らが見ていたり、夜遅くに放送されているような少し過激な深夜アニメのようなものはファンタジーだから成せるものであつて、未来の想像の範囲内には、この時点では全く

入っていないものだった。

「お仕置が必要だよねえ、いくらなんでもね」

そう呟いた研究員に対し未来は

「へっ——」

と強気に微笑んでみせた。それなりに修羅場だつてくぐっているのだ。いざとなつたら魔力を使って痛みを緩和をすることだつてできるといふ余裕もあったし、自分の中に今浮かんでいる『お仕置き』とやらは、自分の立場を考えるとおそらくそうすぐに命までは奪うものではないだろう。強いて言うならば、研究員たちが自分に対して直接肉体的な接触を試みる危険性があるくらいだ。その時はその時で、どうにかして関節技でも決めてやろう——未来はこの時はまだそう思っていた。

【2】

「ひゃっ——!! えっ……!?ちよっ——」

しっかりとした硬さを伴いながらもぬとつとした重たく嫌な感触。それと共に肌に伝わる、

血の通っていないひんやりとした感覚。先ほどまで四肢を拘束していたスライムの別個体がぬるりと伸びてきたのは、他でもなく未来がまだ誰にもその接触を許したことの無い淫裂だった。自らの指ですらもここまであけつぷろげにこじ開けることのない肉穴は緊張と困惑、そして力みとで必要以上にひくひくとひきつっつてしまう。時折その隙間に入り込もうとするスライムの冷たさに思わず「くうう……!!」と未来はみともない声を漏らしてしまう。決して他人には聞かせたことのない甘つたるいその声をこれ以上奏でてなるものかと研究員たちを睨んだ。

あまりに計算外の出来事だった。いくら『財団』が魔獣を自由自在に扱うものとはいえ、研究員がこんな無機物のようなスライムを意のままに操れるような状況にあるとは思っていないかつたものだから、未来はこの状況をどうするか悩んだ。

「(こいつら……下手に挑発したら間違ひなく——)」

その先のことを考えるとぞつとした。

研究員が操作しているタブレット一つで、自分は一人の女としての尊厳を奪われてしまうのだ。そして何より、一番最初にここを責めてきた——その事実は未来にとってあまりに深刻だった。魔力が回復しきるのが先か、自分がこのまま生命体としてギリギリ形を保っているものに初めてを侵されてしまうのが先か——。

「本当なら——」

小太りの研究員が未来をニヤニヤした脂っこい笑みで見上げる。

「このままやることやっちゃってもいいんだけどさ、大人を怒らせたっていうことをやっぱ反省させないといけないんだわ」

誰が反省などするものか——脊髄で言葉を返しかけた未来だが、ぐっとこらえて研究員を睨みつけた。こじ開けられて空気に触れた肉穴、そして尿道が冷たい。

「17番を」

「17番ですか？個人的には23番のほうがいいが……まあ、いいでしょう、たまには」

頼むからその数値が口径を意味しないものであってほしい——未来の願いが通じたのか、ずるりと伸びてきたのは先端が細く、まるでシリンジのようになっていた触手だった。何かを直接肌に注入するには先が針状に尖っているわけでもないし、むしろケーブルのように先端は丸みを帯びている。

「(……何しようってのよ、それで……?)」

時折ひくついたクリトリスをじっと見つめているような触手の動きは停滞し、いまいち意図が分からないもどかしさに未来は自分の思考が汚染されていることに気が付いた。

「(……違っ……ダメダメ!!こんな状況で何考えて——)」

ツン!!とその触手は鋭く身体に異物感を訴えさせた。

「いッッ……!!?」

よりによってどうしてそんな部分を選んでしまったのだ——未来は普通に生きていれば自分からほじくろうとも思わないであろう穴——尿道にその触手が侵入したことに対しおぞましさを覚えたが、それ以上にしみるような痛みが思考を阻害した。ヌッ、ヌッ……と少しずつ本来出ていくはずの穴に侵入していく触手は、未来がどれほど力んで侵入を拒もうともお構いなしにスムーズに身体を逆流していく。

普段魔物と戦い、殴打されたりかすり傷を負った際には感じることもない、下半身が脳へダイレクトに異常を訴えるような、身体の中がヒリつくような痛みはやがて、生暖かさを伴い始める。

「(えっ、嘘……?!? こいつ、何して……ッ?)」

それが注入器に似ている、と最初になぜ思ってしまったのだろう——。思いさえしなければきつと、今自分に注ぎ込まれているものが決して異物ではないと思えただろうに、シリンジ状だった触手はポンプのようにして尿道、そして膀胱に何かを注ぎ込んでいることを未来は理解した。すずんで自分から理解したわけではない。

分からされている、と言うほうがこの場合、正しいだろう。

一体自分に注ぎ込まれたものが何なのかという恐怖の次に襲ってきたのは、こんな卑劣な男たちの前で絶対に漏らしてはならないという、この責めがいつ終わるか分からないという違うベクトルでの恐怖だった。

満足げに尿道から抜け出した触手とは裏腹に、再び空気に触れたことで思わずそれだけで尿意を感じてしまうほどに繊細になってしまった未来の尿道。水中で酸素を欲しがらる金魚のようにその尿道はひくつき、入りきらなかった液体が時折零れ落ちては必要以上に淫裂を濡らす。

「未・来・ちや・ー・ん」

わざとらしい声が下から響く。

「トイレ、行きたくなったんじゃないかな？」

「くっ……!!」

分かって聞いて聞いていることにわざわざ答えるのも癪だ——未来は腹に力を入れ、改めてこの男たちを許してなるものかと心に誓った。

「まあでも、その心配はもういらないけどね」

「……? ……ッ!!」

栓が壊れた水道管と言うべきだろうか、どれだけ腹に力を入れて尿意を閉じ込めようとしても、その栓はゆるく、じわ、じわ……と春の雪解け水のようにやや大粒のものが滴り始めたかと思うと——

「——ッッ!! やつ……やだあッ!! お願ひ、止まって……止まって!!」

培養層の中で重力に導かれて描くみつももないアーチが床に跳ね返った勢いのいい音と共に描かれる。膀胱に注がれた液体が、自分にとって想像を超える以上に良くないものだったこと

が尿の量で分かる。何しろ、どれほど自分で尿を止めようとしても止まってくれないのだ。ゆるんだ尿道は未来の意志とは関係なく、これ以上は出るわけがないというラインを何度も超えながらも尿を出し続け、二分半ばかりの未来にとってはあまりに長く感じられた地獄はようやく一通りの終わりを告げた。

尿道からはしみたような痛みを伴い続け、時折痺ささえ訴える。それが更なる尿意を呼び覚ますようで、辛かった。

「へーえ、『ミズガルズの黒き死神』様もこうなるとただのおもらし少女なわけだ」

「やめてやれよ、仮にも『ミズガルズの黒き死神』様に失礼だぞ。ま、そっくりさんかもしれないけどな。まさか本物がおしっこ我慢できないなんてことはないだろ。見ろよあの量。おもらしなんて量じゃないぞ。途中から人前でおしっこすることがちよつと気持ちよくなつてたんじゃないかねえ」

「くうっ——!!」

拘束がほどけたらハイキックでも食らわしてやろう——さっきまでそう思っていた未来は考えを改めた。

よりによってこんな連中に自分の肩書きをバカにされるとは——ミズガルズに君臨する魔法少女としてそれなりに自分の立場や肩書きに矜持があった未来にとって——まして、倒すべき忌々しい敵にその名を穢されることは何よりも屈辱だった。

上層部に注意されてもかまわないから、骨の一つでもへし折って——いいや、いっそ半殺しにでもしてやらなければ——。

「あなたたち……絶対に許さないから……!! 魔力さえ回復しきれば、この装置どころか、こんな施設なんて一瞬で終わりなんだから!!」

悔しさと怒りと恥ずかしさの入り混じった赤面で強い敵意を向けながら未来は研究員をじつと睨みつけるが、研究員たちにはもはや笑いごとにはしか聞かえてないようで、半笑いでその言葉を受け取っている。

「……だつてさ? ふふっ」

「なっ……何がおかしいのよ!!」

眉を吊り上げて未来は研究員たちをずっと睨み続けているが、未来の対抗心に反して、スライムによって開脚させられた上に尿で濡れた淫裂をかつ開いたままという光景は確かに滑稽かもしれない。それは仕方ないことだ。こんな状況でどこに勝機があるのかなどとも思われてゐるのだろう。

舐められたものだ——!! 未来の怒りのボルテージは上がり続け、脈の鼓動を自分でも感じ取れるほどだ。

「いやね……別にいいんだよ。こつちの話だから」

「じゃあもう、やつちゃおうぜ。変に時間稼がれて本来の目的を忘れちゃいけないし」

「そうすつかね。ちゃんと映像撮れてる?」

「悪趣味だなー。そんなに残しておきたいかね、いつもいつも」

「今日のは特別だろ。なんだつて『ミスガルズの黒き死神』様だけ。あとで高く売れるだろうよ。俺たちだっていつまでも下っ端でいられるかよ」

「お前、やなやつだね」

完全に自分を無視して研究員はタブレットを再び手際よく操作しはじめる。

「(本来の目的……?)」

未来自身、自分を捕まえておいてるのだからこんなもので拷問が終わるとは思っていない。しかしながら彼らの言う『本来の目的』というものをただぼんやりとだけ匂わせて蚊帳の外にされるのはいい気分はしなかった。自分から世界の闇に足を突っ込むのもそれこそ飛んで火にいる夏の虫というものなのだろうけれど、こちらの狙いが時間稼ぎだと悟られ始めている以上どうにかしなければならぬ気持ちでいっぱいだった。

こういう時、自分も所詮、人並みの女子高生なのだとも未来は痛感した。

ウイーン……と培養槽の床がゆっくりと開いていくと同時に、下から赤黒い触手が伸びてくる。自分の手首と同じくらいか、あるいはもう少し太いだろうか——ベチン!!ベチン!!と暴れまわる触手は強化ガラスを時折殴りつけるが、びくともしない。

「……何?それで首でも締めるつもり?」

普段の生活ではあまり見ることのない不気味なその色遣いの触手に未来は嫌悪感を抱きながら、やや生臭さを漂わせはじめた培養槽越しに研究員を睨みつける。

「あーあ、ませちゃって」

「本当はだいたい想像ついてるくせに。コレだよ、コレ」

ケラケラと笑い声を漏らしながら研究員は未来を見上げ、人差し指と親指でわっかを作るとそこにもう片方の手で人差し指をわざとらしく出し入れしてみせる。その動きが何を意味するのか、未来には想像はできたが——理解が拒んだ。

「……いや、冗談はよしなさいよ!! そんなの……っ!!」

「冗談も何も、これから嫌でも現実になるんだよ」

だらしなく開かれたままの淫裂に照準を合わせるようにじいっと触手の先端がくねり、そしてズルリと先端から——人間を模したというよりは人間そのものの男根が皮を剥いて亀頭を表す。剥いた中から出てきた亀頭や根の色……何もかもが人間そのものだった。そう、工事用の

電線ケーブルよりもはるかに太い、そのサイズ以外は。

未来の不可侵領域をじっと見つめたままの触手は、血管らしきものが時々ドクドクと脈打つたばいばいに膨れてみせ、狙いをつけた鈴口は触手が脈打つたびに、肉を目の前にした獣がよだれを垂らすようにして粘度のある先走り汁を垂れ流している。

「(こんなの本当に挿れられたらヤバイっ……!!) だってこんなサイズ——」

自分が指で慰めるときのようなサイズ感ではない触手のサイズ感に未来は辟易した。こんなものを本当に挿れられたりでもしたら、どうなってしまうかなど想像したくはなかった。

「今ならまだ許してあげても良いから、止めッいいいいいいいいいい!!」

こと、こんな状況に至っても強がる未来に対し、触手はその言葉を遮るようにその先端を一気に割れ目の中へ潜り込ませた。

不可侵だつた領域は無遠慮に、そして容赦なく侵され、乙女の最後の抵抗の壁すらもあっけなく突き破り……あっさりと未来の初めてを奪ってしまった。

「うあ……そんな……嘘でしょ……こんな……こんなこと……」

認めたくない事実が、今になってじんわりと響く痛みとなって未来に自覚させていく。できればそのとき流す涙は嬉し涙であってほしかった——学生をしながら戦いに明け暮れる日々の中とはいえ、多少は恋愛について考え始める年齢だ。思わず瞳にありとあらゆるネガティブが涙となって溜まりそうになる。

次に上げたのはうめき声ではなく、甘さを伴った声だった。最近また少し大きくなったような気のある未来の豊かな乳房をスライムはぐにぐにと揉み始め、しつかりと宙を向いてつんと立っていた乳首を、形を変え細く伸ばしたスライムがこねくり回し始める。

皆が自分のプロポーションに注目していることも未来は知っていたし、そんな自分の身体を未来は誇らしく思っていた。だからこそ、自分で自分を慰めるときにはその乳房を愛撫することもよくあった未来。そうして自らで慰め続けた乳首は、未来にとって今や立派な性感帯だった。

「(そこは……まずい……っ！)」

スライムは時折乳首を包み込むような形をし、引っ張ってしごき上げてみたり練りまわしてみたりと、乳房の愛撫の他に執拗に乳首をねぶることをやめなかった。

「んっッ……ふうッ……!!」

「(ダメなんだって……そこはッッ……!!)」

魔力でなんとかこらえている未来だが、頭がチカチカする感覚に何度も囚われ、時折身震いしたくなるほどの甘い感覚が全身を襲っても四肢をがちりと拘束したスライムがそれを許してくれない。

そのたびに力んだ膣の中はねっとりとした愛液を分泌し続け、触手に快楽を与えてしまう。

「(ダメッ……感じてない……感じるわけない！……こんなので感じるなんて……あるはずない!!)」

感じている、と頭が理解した瞬間、自分は快楽に墮とされてしまう——それだけはなるものと、頭で何度もその事実を否定し、歯を食いしばり、奥歯で舌を噛む未来。それをあざ笑うようにしてスライムは両方の乳首の先端をごしごしとこすり続ける。研究員たちにはもう自分が感じていることは全部筒抜けなのかもしれない。それでも、それを声に出すことだけは、一人の少女として、絶対にしたくなかった。

「未来ちゃん」

「イくって宣言したら、中出しだけは許してあげてもいいよ」

「……!?!? 中……!?!? 中……!?!? まさか……ッ……ふっんッ……!!」

耳を疑う言葉が鼓膜に届いた未来は思わず魔力の集中が途切れそうになった。

「いやー、わかるでしょ。どう考えてもこれ人間のチンポじゃん」

「それを遺伝子組み換えでこんな風にしたわけ」

「ってことは中に出されたらどうなるかくらい、未来ちゃんならわかるよねえ？」

「——ッ!?!」

冗談であってほしいが、きっと冗談ではないだろう。「財団」が生み出している魔物には人間だったものを母体としたものも少なくないとは聞かされていたし、全く異なる種族の動物同士のかけ合わせといった遺伝子操作したのも少なくない。

本当にこの触手に射精という機能が備わっているならば——。

信じたくはないが、それでも未来は敗北を口にしたくなかった。尿道を侵され、そして純潔まで奪われ、自分がそんな状況において感じている——。一人の雌になってしまっている——。それを宣言することだけは、未来のプライドが許さなかった。

「じゃ未来ちゃんはこの誰のものか分からないどころか人間かどうかも分からない赤ちゃんがデキちゃってもいいわけね」

「ほおー、じゃあ未来ちゃんの魔力を受け継いだ魔獣なんかがこの島でいずれデビューするわけね。それはそれは」

屈してなるものか——。

未来の魔力は痛みを和らげるためだけに使われているわけではない。神経を身体の内部に集中させることで、子宮の中にシールドを展開することによって最悪の事態を逃れることもできる。

しかし、魔物に“中出しをされる”ということには変わりはない。その事実に対する嫌悪感で未来の精神はかき乱された。

触手の粘液に媚薬でも含まれているのか、はたまたその巧妙な動きで本当に感じてしまったているのか定かではないが、研究員たちには声を聞かれない程度の、絞り出すようにしてこらえた喘ぎ声を漏らす未来は、ギリギリのラインで触手の責めにひたすら耐え続けていた。

「んいっ！んああ、ふーふーっ、んんっ！あっ、うぐっ！んんっんんっ！！」

いやに粘度が高く、他人に聞かせることも、これまで自分でもこれほど立てたことのない水っぽいぐちゅぐちゅ、ぶちゅぶちゅとした音が次第に大きくなっていく。

未来の意志に反して、その瞬間が近いことを感じ取っていた。

「んあっ！ あっ！ んんんあっ！！ うっあっあっあっ！ こいつ……ッ、だんだん激し、くっ！！ うあう！！」

ひときわ動きが激しくなる触手の動き。そんなところまで人間を模倣しているのか、それともこの触手は人間が触手の姿になっただけなのか——いつか愛する者が現れたときにもこんな風に自分の奥深くを探られるのかと考えると、なおさら自分の初めてがこんなものに奪われたことに未来は屈辱感の上乗せされた。きつと、これからもその上乗せは終わることがなく、どこまでも続く青天井なのだろう。

「くっ！！ んッッ！！ はアんッッんんっ！！ ふんッッ……！！ んんんーっ！！」

なかなか終わることのないラストパートに、改めてこれが人間との交わりではなく、言語を持たないモノとの性行為——もとい繁殖行為なのだと思つた。自分はこの人人間のパーツを借りたモノに無理矢理導かれようと——導く、という言葉ほど紳士さのない、むしろ絶頂の渦に拉致される形で未来は絶頂を迎えようとしていた。

「んぎっ！！ んっ！！ あっ、あっ！！ 触手が、膨らんで……ッ！！」

中に出される……そう直感し、胎内にシールドを展開しようと魔力を集中させる。

——その瞬間

「あつ、ダメ、イッくうううううううあああああああ！」

なぜ、よりによつてこんな最悪なタイミングで……と、体を仰け反らしながら未来は思った。思わず強化したシールドが解かれてしまいそうなほど、未来はこれまでの生活で感じたほどのない、大きく、そして淵まで叩き落されるような深い絶頂を迎えた。

ブツ……ブリュツ……!!と、自分の身体の中に重たいものが注がれていくのがわかる。これは液体なんて生半可なものではない。自分の身体を束縛しているスライムほどではないが、しっかりと粘度のある——しっかりと泡立てたクリームよりもっとべったりとして、そして自らの体温よりもっと熱い、半固形ものが子宮に注ぎ込まれていく。

「ああ……あああああつ!!出て、るう……!出されてる……ッ! 触手の……触手の精液が……!」
子宮の中にバルーンでも仕込まれたように、その腹は膨れた。ドッ、ドッ……!と触手が波打つたびに、食べ過ぎた後の比ではなく、むしろそれは妊娠を隠し切れなくなった女性のよう。一段、また一段と拡張されていく。胎内をシールドが守っているとはいえ、交尾の相手が魔物だったということを改めて認識させるには十分すぎるほどのおぞましさがあるそこにはあつた。

「おええ……っ!!きもちわるい……っ!! おぞっ……うぞ……っ!!」
嫌悪感や腹部の圧迫感で思わず胃液が逆流する。

「お腹が……重たいっ……! 魔物の……精液で……私のお腹……ぱんぱんに……なってる……!」

残酷な事実にも、思わず涙が流れる。しかし、触手の動きにひと段落付いたことで、心に傷を負いながらも未来は次第に冷静さを取り戻しつつもあつた。魔法少女は最期まで戦い抜かなくてはならない——その強い意志が不安定に綱渡りする精神の支えになっていた。

「(大丈夫……シールドは壊れてはいないし……触手だつて動きが止まってくれる……)」

不安を拭いきれるほどの材料はなかったが、動きが止まってからは先ほどより触手が少し少なくなったことを膈内で感じ取った未来は、ひとまずはこの責めを耐えたと認識した。

自分は敗戦の中に一握りの勝利を得たのだ——。

未来を強気にさせたのは、怒りがそうさせたのか、それとも未来が思っている以上に長い時間が経過したからなのか、それとも自分でもまだ気づいていない内なる力があるからなのか——自分でも感じ取れるほどに魔力が回復しているということだった。

にゆるり、と案外そつけなく未来から抜け出した触手は生気を失ったようにして床にべたりと倒れる。ここからもう一度自分を襲ってくるということはないだろう。

「(まだ諦めるには早い……! 私……『ミズガルの黒き死神』は終わってない……!)」
内なる闘志が、未来の曇りかけていた瞳を再び輝かせた。

「プロトタイプなんて案外こんなもんかね」
「まあ、所詮は人間がベースだからねえ」

未来よりも先に疲弊してしまつた触手に対して強い失望があつたのか、へたり込んだ触手に

一瞥をくれた研究員たち。未来はそれらを先ほどよりも強い表情で睨みつけた。ここから何とかなる打算が今の自分にはある以上、その表情は生気を完全に取り戻した、まさに戦士ものだった。

「あなたたち……っ!!」

今まで生きていてこれほど鋭い声を上げたことがあっただろうか——そんなことを思いながら、未来は研究員を声で刺した。

「残念だけど、遊びはもうおしまいだから。どれだけ許してって言っても……絶対に……そう、絶対に許してあげないんだから!」

そんな未来の明確な反攻声明に研究員は大口を開いて笑い声を上げた。おかしくておかしくてたまらなかった。

「なっ……何がおかしいのよ!!」

「いや、おかしいでしょ。そんなボテ腹で、おマンコからザーメン垂らして乳首おっ立てて言うセリフじゃないでしょ。客観的に自分のこと見返してみなよ。今の未来ちゃんのとどこに一体勝機を見出したの?」

「くっ……!!」

へらへら表情を浮かべる研究員に、未来の自尊心は激しく煮えたぎった。純潔を奪われ、穢され尽くされただけでなく、自分の実力すらついに甘く見られてしまったということは、これ

までの未来のキャリアに泥を塗られるようなものだった。許されるのであれば、情報を聞き出した後に本当に殺してやろうか——とさえ未来は思った。

あまりよくないやり方ではあるが、怒りで増幅させた魔力を瞬間的に強く開放させることで、自分の周囲に強いエネルギー波を放つことだってできる。体力の消耗もあるし、コントロールを誤れば情報を聞き出す以前に本当に文字通りこの施設や研究員を吹き飛ばしてしまうかもしれない。

あくまでも魔法少女は戦闘を行う上で、破壊が前提であってはならないのだ。だからこそ、これ以上負の感情で魔力を制御できなくなるような状況を未来は避けたかった。

「(こんな時だからこそ一度落ち着いて——そう——いつもやってるように——)」

スウッ……と深呼吸し、一度目を閉じて神経を最大まで研ぎ澄まし、心臓から指先の細い血管すべてにまで魔力の流れを乗せた——その時だった。

【4】

「……思ってた以上に猪武者なんだねえ、『ミズガルズの黒き死神』も」

